報告

最新調査成果報告

報告者紹介
矢野　裕介（やの　ゆうすけ）
同志社大学文学部卒業。
熊本県文化課を経て、現在、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」勤務。
鞠智城跡発掘調査に従事。

・報告「最新調査成果報告」

矢野裕介（熊本県教育委員会　歴史公園鞠智城温故創生館参事）

はじめに

皆さん、こんにちは。熊本県教育委員会、歴史公園鞠智城・温故創生館の矢野です。よろしくお願いします。

本日は、「鞠智城跡の調査と成果」ということで、昭和四二年から熊本県教育委員会で実施してきました鞠智城跡発掘調査の最新成果についてご報告します。

実は、今年の三月に、これまでの発掘調査成果を総括した「鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第八～三二次調査報告―」を刊行することができました。この報告書では鞠智城がどのように変遷していったのかというところを中心に考察を加えましたが、その結果、七世紀後半から一〇世紀中頃まで、約三〇〇年もの長きに亘って存続した城であったということがわかり、その間、城の機能が変化しながら五時期に区分できるということが明らかになりました。本日は、このことを中心にご報告します。

一、六国史にみる鞠智城

古代律令制下、奈良時代から平安時代にかけて六つの国史、「六国史」が中央政府により編纂されますが、鞠智城跡は、その六国史に城名が登場する城跡です。その初見は、『続日本紀』文武天皇二（六九八）年五月の条で、「大宰府をして大野・基肄・鞠智（くくち）の三城を繕い治めしむ」とあります。大野城は福岡県大野城市・太宰府市・宇美町を中心に、基肄城は佐賀県基山町・福岡県筑紫野市に立地している城ですが、その三番目に記載されているのが鞠智城で、それら三城を修理したという内容になります。鞠智城は、その後、『日本文徳天皇実録』、『日本三代実録』にも登場しますが、現在の「菊池」という漢字が使われており、「菊池城院」あるいは「菊池郡城（境）院」という名前で登場します。いずれも平安時代のことになりますが、「兵庫の鼓自ら鳴る」という奇怪な現象が城内で起こったということが、肥後国から中央政府にたびたび報告されています。（「兵庫」とは武器を納めていた倉のことですが、その倉に置かれてあった鼓がひとりでに鳴ったという内容になります。）そのうち、『日本文徳天皇実録』天安二（八五八）年六月の条には、その奇怪な現象の後に、「不動倉十一宇火く」といったことが記録されています。「不動倉」というのは備蓄用の米を納めていた倉のことですが、城内にあった不動倉十一棟が火災にあったという内容になります。『日本三大実録』元慶三（八七九）年三月の条を最後に鞠智城に関する記録が途絶えますが、鞠智城は、修理してから、少なくとも一八一年間存続した城であったことが文献上からもわかります。

写真１　矢野裕介氏

二、鞠智城跡の概要

鞠智城跡は、熊本県の北部、阿蘇の北外輪山から有明海へ西流する菊池川の河口から四〇キロほど遡った中流域、福岡県との県境を限る筑肥山地の主峰、八方ヶ岳（標高一〇五二メートル）の南西側の麓に位置しています。朝鮮半島における白村江の敗戦（六六三）以降、敵国であった唐・新羅の侵攻に備え、天智四（六六五）年に大野城、基肄城、天智六（六六七）年に金田城（長崎県対馬市）、屋嶋城（香川県高松市）、高安城（大阪府八尾市ほか）などを配し、国家防衛網を築くわけですが、その過程で鞠智城も築かれたものと思われます。鞠智城跡は学術上、古代山城（こだいさんじょう／こだいやましろ）といいますが、古代山城には、これら城のように国史に記載のある城のほか、国史に記載の無い城があり、それらを含めると、西日本各地で二二城（うち高安城跡は比定地）が確認されています。そのうち、鞠智城跡は最も南に位置しています。当時、西海道諸国島の統轄、対外交渉、西辺防備の役割を担った地方出先機関「大宰府」からは直線距離で南に約六二キロ、肥後の国府があった熊本市周辺からも北に約三〇キロ離れた場所にあります。

次に、鞠智城跡の城域ですが、古くから狭域説と広域説がありましたが、現在では、周りの長さが三・五キロ、面積が五五ヘクタール、この範囲を真の城域とし、それを含む六四・八ヘクタールが国の史跡に指定をされています。山鹿市と菊池市のちょうど市境に位置しており、九割が山鹿市、残り一割が菊池市となります。鞠智城跡の周辺に「木野（きの）」という地名が残っていますが、古代律令制下、周辺は肥後国菊池郡に属しており、菊池郡にあった九郷のひとつが城野郷にちなむ地名となります。鞠智城の北西側には大同二（八〇七）年に京都の松尾大社から分霊されたと由来される「城野松尾神社」があり、その西側の盆地には、古代の土地区画となる条里の地割が推定されています。さらに鞠智城跡の南側には車路（くるまじ）という地名から復元

された古代官道が推定されており、現在でも、福岡、大分、阿蘇、さらに熊本市中心部に向かう交通の要衝地となっています。

鞠智城跡の発掘調査は、昭和四二年度から平成二二年度までで三二次を数えます。その結果、城域の南側の深迫、堀切、池ノ尾の三箇所に城門後、西側と南側の尾根線上に、それぞれ西側土塁線、南側土塁線、城の中心となる長者原・上原地区に七二棟の建物跡、その北側に貯水池跡が確認されています。また、出土した遺物としては、須恵器、土師器などの土器や建築用材、平鍬、横槌などの木製品、百済の様式を受け継いだ単弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする瓦類、「秦人忍□五斗」と墨書された木簡、貯水池跡の池尻部から出土した百済系の銅造菩薩立像があります。

三、学期区分と変遷

冒頭で述べましたとおり、鞠智城は三〇〇年間存続し、その間、機能と役割を変えながら五期（鞠智城Ⅰ～Ⅴ期）に区分できるということが明らかとなりましたが、次に各期の様相についてみていきたいと思います。

まず、鞠智城Ⅰ期ですが、鞠智城の創建期にあたります。年代的には、七世紀の第3四半期から第4四半期となります。この時期の建物は掘立柱建物で、城内に建物の主軸方向を大きく西に振る形で建物が配置されますが、小型の建物も多く、多様な様相を示していることが特徴として挙げられます。それに対して、城門や土塁など、城の外郭線上の施設はしっかり造り込んでいることが明らかとなっています。

三つの城門跡のうち、この期に確実に位置づけられるのが堀切門跡です。堀切門跡では、崖地を掘り切っ

て通路（登城道）を通していますが、緩やかになる傾斜変換点に、門の支柱穴が見つかっており、そこに門礎石があったものと思われます。この堀切門礎石は、一石に両扉分の二つの軸摺穴が穿たれているのを特徴とします。土塁線では、南側土塁線の西端部で、高さ五～八メートルの中位にテラスを持つ二段構造の土塁跡が確認されており、西側土塁線の北端部でも土塁跡が確認されています。いずれの土塁跡にも、土塁の基礎となる一番裾にあたる部分に、土留めのために石を並べた石列が確認されています。

また、創建当初から長者原地区の北側谷部に貯水池も造られました。南北に長い約五、三〇〇平方メートルの規模を有しており、水汲み場や貯木施設が見つかっており、様々な用途に使われていたことが明らかとなっています。貯木施設では、木舞という細い材を数本ないし十数本単位で置かれたり、蔓が巻かれたりした状況で見つかっています。

最後に、池ノ尾で見つかった水門です。雨水や湧水を城外に排水する施設のことを水門といいます。約九・六メートル幅の城壁の下に暗渠を通す構造となっており、現在のところ池ノ尾でしか確認されていません。

以上が、鞠智城Ⅰ期の施設となりますが、このように、城門や土塁線など外郭線上の施設をしっかり造り込む一方、貯水池を除き城内の施設の整備まで及んでいなかったことが特徴として挙げられます。

次の鞠智城Ⅱ期ですが、鞠智城の最隆盛期にあたります。年代的には、七世紀末から八世紀第一四半期前半で、長者原地区の北東側から上原地区の北側にかけて、「コ」字形に配置された建物群が出現するのが大きな特徴として挙げられます。城の管理・運営を司った管理棟的建物群と考えられ、これら建物郡の南側に方位を合わせるような形で建物が配置されます。城内の施設を再編した段階に位置づけられ、古代山城では唯一の八角形建物もこの期に出現しました。八角形建物跡は、約五〇メートル離れた南北二箇所で見つかっ

ており、南側のものが心柱を中心に三重に巡るのに対して、北側のものは二重に柱が巡ります。全国的にみても構造上珍しく、韓国の二聖山城（京幾道河南市）に類例が求められます。また、この期の土器の出土が非常に多いことから、多くの人員がこの鞠智城に配置されていたことが推定され、鞠智城の最盛期であったと考えられます。

次の鞠智城Ⅲ期は、年代的には八世紀第1四半期から第3四半期にあたります。管理棟的建物群と八角形建物は存続しながらも、大きな変化として、礎石建物の出現が挙げられます。城内最大の礎石建物、四九号建物跡もこの期の建物ですが、長倉形式の建物で、特殊な倉庫であったと考えられます。それ以外の礎石建物は、比較的小振りの礎石を使用していることがこの期の特徴として挙げられます。また、この期の土器の出土は皆無に等しいことから、城の維持・管理に必要な最低限の人員を配置するなど、城の運営に変化が生じた可能性が指摘できます。

続きまして、鞠智城Ⅳ期ですが、鞠智城の変革期にあたり、年代的には八世紀第4四半期から九世紀第3四半期になります。鞠智城の機能の変遷の中で最も大きな変化を遂げるのがこの期になります。この期の特徴として、城を管理する管理棟的建物群の消失、貯水池における貯木場の埋没が挙げられます。また、鞠智城Ⅲ期の礎石建物の礎石が小振りだったのに対して、この期になると、大きな礎石が使用されるようになります。こうした変化から、食糧の備蓄施設としての機能が主体となるというふうに考えているところです。先ほど『日本文徳天皇実録』の中に、「不動倉十一宇火く」という記述を紹介しましたが、この不動倉がこの期の建物であったと考えられます。

最後の鞠智城Ⅴ期です。年代的には、九世紀第4四半期から一〇世紀第3四半期で、鞠智城の終末期にあ

たります。鞠智城Ⅳ期の終わりに、不動倉十一棟が焼失し、建物の棟数が減少するものの、五六号建物跡のように、新たに大型の倉庫を建てるなど、食糧の備蓄施設としての機能が存続しながら、廃城を迎えたものと考えられます。

以上、鞠智城の五期にわたる変遷についてお話しましたが、鞠智城の場合、鞠智城Ⅰ～Ⅲ期となる七世紀第3四半期から八世紀第3四半期までは、築城当初の目的となる軍事施設として機能が主体であったのに対して、鞠智城Ⅳ～Ⅴ期となる八世紀第4四半期から廃城となる一〇世紀第3四半期までは、軍事施設としての機能は存続するものの、食糧の備蓄施設としての機能が主体を占めていたのではないかと考えられます。特に、鞠智城Ⅰ～Ⅲ期前半までの間、鞠智城は、大宰府とほぼ連動した動向を示しており、大罪府防衛の軍事拠点であるとともに、その管理・運営についても大宰府が大きく関与していたものと思われます。

おわりに

最後になりますが、今後も大宰府や肥後国府、大野城、基肄城をはじめとする古代山城との比較検討や、出土遺物の詳細な分析をもとに、さらに鞠智城の機能というものを考えていければと思っています。

以上を持ちまして、「鞠智城跡の調査と成果」についてご報告を終わります。ご清聴、どうもありがとうございました。